
研究

韓国におけるインターネットコミュニティへの参加と 人間関係ネットワークの展開についての探索的な研究 —血縁・学縁・地縁を中心に—

Exploratory Research on Participation in the Internet Community and the Development of Social Networks in South Korea

キーワード：

インターネットコミュニティ, 血縁, 学縁, 地縁, 社会関係資本, 韓国

keyword：

internet community, blood ties, academic ties, regional ties, social capital, South Korea

忠南大学校 李 潤 馥

Chungnam National University Yunbok Lee

要 約

韓国では朝鮮王朝時代から父系血縁、学縁、地縁が発達し、これは韓国社会の都市化、高度成長の過程で大きな影響を及ぼしてきた。特に1990年代後半から血縁、学縁、地縁が韓国社会の代表的な社会関係資本と指摘される中で、情報化の進展とともに韓国のオンライン上には数多くのカフェと呼ばれる様々な宗親、同窓会、郷友会インターネットコミュニティが構成されてきた。そこで本研究ではアンケート調査を通じて、宗親、同窓会、郷友会カフェへの加入時期、参加頻度、そして投稿頻度と三つの変数、即ち1) 現実世界の門中・宗親会、同窓会、郷友会活動への参加、2) 日頃親しくつきあっている親戚、同窓生、同郷人の数、3) 人間関係の効用性に対する認識との関連について検討した。その結果、加入時期は同窓会活動への参加、日頃親しくつきあっている同窓生の数のみと統計的に有意な関連があり、加入時期が早いほど同窓会活動への参加回数及び日頃親しくつきあっている同窓生の数が多いということがわかった。しかし、加入時期とその他の変数は何れも統計的にほとんど無関係である。一方、参加頻度及び投稿頻度は二つとも三つの変数と統計的に有意な関連があった。宗親、同窓会、郷友会カフェへの参加頻度が多いほど、現実世界の門中・宗親会、同窓会、郷友会活動への参加が盛んであり、それらの人間関係は日頃親しくつきあっている親戚、同窓生、同郷人の数が多く、相互利益意識や実力主義

の認知が深まっている。それを裏付けるように投稿頻度の分析結果も同様であった。これは韓国でインターネットコミュニティの普及とともに、血縁、学縁、地縁と係わる活動が活性化し、血縁、学縁、地縁が一次的な人間関係としての性格と共に、社会的な人間関係としての性格も併せ持っていることを示唆していると言える。

Abstract

Blood ties, academic ties, and regional ties have been traditionally important social capital in South Korea. Reflecting on the unique social structure of South Korea, Internet communities based on blood ties, academic ties, and regional ties have developed in South Korea. This paper examined the relationships among participation aspects (participation time, visit frequency, posting frequency) and 3 variables: 1) participation of clan gathering・alumni association・hometown-rooted association, 2) the number of relatives・alumni・friends from one's hometown, 3) recognition of the utility from human relationships. Our research finds that participation time is relevant to the participation in an alumni association and the number of alumni. But, participation time is irrelevant to other variables. Visit frequency is not irrelevant to the 3 variables. When visit frequency is higher, the participation of clan gathering・alumni association・hometown-rooted association, the number of relatives・alumni・old-hometown's friends, and the sense of mutual benefit and the recognition of the merit system are all also higher. Posting frequency is not irrelevant to the 3 variables in the same way, like analysis results of visit frequency. This result means that blood ties, academic ties, and regional ties have 2 aspects of both personal relationships and social relationships.

(受付：2015年12月28日，採択：2016年5月10日)

1 はじめに

1.1 問題意識

韓国では一般的に「ウリ」⁽¹⁾と呼ばれる血縁、学縁、地縁が発達しており、これは韓国社会の産業化、高度成長の過程においても大きな影響を及ぼしてきた。例えば、2014年の韓国の人口は五千四十万名ほどであり、2014年上半期の輸出及び輸入の合計は5千464億ドルで世界8位の規模であるにもかかわらず、韓国企業は基本的に同族的な性格をもっており、大多数の企業は創業者あるいはその子孫が最高経営者を務めている。また、歴代大統領が持っていた人事スタイルの共通点は出身地域の名門高校出身の重用⁽²⁾であり、このような政治領域の人事慣行は企業や銀行などの人事慣行にも直接的に影響を及ぼしていると言われる⁽³⁾。

これまで韓国ではこのようなウリの社会的な機能は主な一つの争点となっており、一般的にこのようなウリの社会的な機能はその情実的な性格の故、非常に否定的に評価されている。例えば、朴承寛(2005)は「ダイオルレクティブとロゴスの死」と概念化している。

しかしその一方で、1990年代後半からウリの社会的な機能を肯定的に評価するグループ⁽⁴⁾も現れ、ウリは韓国の代表的な社会関係資本に当たると指摘されている。すなわち当時儒教は韓国産業化の成功の背景として見直され、儒教に基づく人間関係、即ちここでいうウリについても再評価が行われる。その際、特にネットワークの閉鎖性が信頼、規範などを維持し向上させる機能をするるとみるColeman(1988)、Putnam(1995、2000)等の社会関係資本の議論がその根拠になる。

具体的にColeman(1988)は、ニューヨークのユダヤ人ダイヤモンド商店街は閉鎖的な共同体であり、盗難保険などにも加入せず、ある商人は他の商人にダイヤモンドが入った袋をためらい

もなく鑑定のために渡せるが、これはこの市場が円滑に機能する上で大きく貢献しているという(p.S98)。また、Putnam(2000)は例えば同じ人種だけに慈善と救護事業を行う団体や閉鎖的なカントリークラブのような結束型の社会資本も否定的な外部効果を生むという予想とは違い、民権運動や超教派的な宗教団体のような連携型の社会資本とともに、非常に肯定的な社会的な効果を生むことができるという(p.23)。

このような議論に基づいて、基本的に閉鎖的な構造を持ち成員の間に信頼が共有されている韓国のウリも企業や組織のコスト削減効果を生み、韓国の産業化に貢献しているという評価が行われる。その上、ウリは韓国の代表的な社会関係資本に当たると指摘されている(リュソクチュン、2002)。

こうした中、2000年代に入りオンライン上には血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティが数多く形成されており、これは韓国の特徴と指摘されている(橋元他、2007;イユンボク、2007)。特に韓国では2005年頃から血縁集団及び同郷集団の主な参加年齢層である40代以上のインターネット利用率が大幅に上がる。

例えば韓国インターネット振興院によると、2005年12月の韓国インターネット利用率は40代68.7%、50代35.7%、60代以上11.9%であるが、2009年12月には40代84.3%、50代52.3%、60代以上20.1%になる。2014年12月には40代97.5%、50代86.1%、60代50.6%、70歳以上14.1%になり、40代は大多数がインターネットを利用していることがわかる。

このような中、韓国では血縁、学縁、地縁の社会的機能に対する評価が否定的であったという影響もあり関連研究があまり多くないが、ここでは血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティ利用に関連した先行研究を概観する。まず日韓のインターネットコミュニティ利用行動を比較したIshii & Ogasahara(2007)によると、日

本に比べて韓国ではインターネットコミュニティ上での関係と現実の人間関係との関連が強く、より高いレベルの社交的な満足を志向する傾向がみられるという。また米韓大学生のSNS利用動機を比較したKimら(2011)によると、楽しさ・気分転換次元の利用動機のウェイトが大きい米国に比べ、韓国では既存の人間関係から社会的なサポートを得ようとする利用動機のウェイトが大きいといえる。

そして、ニッチ(niche)分析を活用し血縁、学縁、地縁など現実世界の人間関係に基づくコミュニティとバーチャルコミュニティの機能的な関係について分析した研究結果によると、韓国ではインターネット利用者たちが現実世界の人間関係に基づくコミュニティは主に人間関係の形成及び情報習得次元の充足のために、そしてバーチャルコミュニティは主に楽しさ・気分転換次元の充足のために活用しているという(イユンボク, 2009)。

2000年代後半からは血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティの代表的なケースを選び、それぞれのインターネットコミュニティの全体的な構造や交流の様相を検討した事例分析も行われている。その結果によると、血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティのそれぞれには様々な形態のものがあるが、血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティ何れもその中で基本的な参加資格さえあれば誰でも参加できる形態のものが主な交流の場となっており、特に血縁、地縁に基づくインターネットコミュニティには主に40代以上の男性が参加している(LEE, 2009;イユンボク, 2012;イユンボク, 2013)。

このようにインターネットコミュニティ利用行動やSNS利用動機、現実世界の人間関係に基づくコミュニティとバーチャルコミュニティの機能的な関係、そして事例分析などの関連研究が行われている。しかしこれまで現実世界の血縁、学縁、

地縁に基づくインターネットコミュニティへの参加と参加者の人間関係ネットワークとの関連に関する分析は行われたことがない。

そこで、本論ではアンケート調査を通じて血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティへの参加と参加者の人間関係ネットワークとの関連について検討する。とりわけ、本論では血縁、学縁、地縁インターネットコミュニティへの参加様相、具体的に参加時期、参加頻度、投稿頻度と1) 現実世界の門中・宗親会、同窓会、郷友会活動への参加、2) 日頃親しくつきあっている親戚、同窓生、同郷人の数、3) そして人間関係効用性に対する認識との関連について考察する。

1.2 用語の整理

一方、本論でいう血縁とは父系血縁、特に韓国で発達した父系の同姓同本集団を意味する。これはあくまでも父系の血筋につながることを前提とする人間関係であり、非血縁者は基本的に成員になれない。韓国では古代統一新羅時代に中国の姓(漢姓)を受け入れる。しかし、高麗初期以降、姓が一般化する過程で血族の系統を全く異なる同姓が多く現われ、異族の同姓と区分するために本貫(本)⁽⁵⁾も普及され始める(イスゴン, 2003)。

仏教が国教であった高麗王朝とは異なり、崇儒抑仏を国是とする朝鮮王朝社会において血縁の先祖は性理学的な死生観の普及、特に王家の喪礼と係わる政争である礼訟論争⁽⁶⁾の発生とともに次第に重要な意味を持つようになり、17世紀後半から支配層の両班を中心に祖先の祭祀のために父系の血縁集団の組織化が本格的に始まる。その後朝鮮末期には始祖の子孫すべて、即ち同姓同本の全員が一族であるという意識を共有するようになる。

現在韓国ではこのような父系の血縁集団を門中(ムンジュン)あるいは門中組織といい、その成員をよく宗親(ジョンチン)もしくは一家(イル

ガ)と呼ぶ。また、このような門中組織の中には5～6世帯で構成される党内(チバン)、数十～数百世帯で構成される派門中など様々な下位血縁集団があり、都市化とともに都市では遠親者からなる新たな血縁集団が構成され、このような血縁集団は一般に宗親会(ジョンチンフェ)あるいは花樹会(ファスフェ)と呼ばれる。

学縁は同じ学校を出た同窓生の間人間関係をさす。韓国の場合、同級生だけにとどまらず、同窓生というだけでその親密度は計りしれないものがあるとされる(三木, 2011)。これは世界的にも稀である文人官僚中心の朝鮮王朝社会で官僚の役職には限りがあるが、科擧の合格者数が大幅に増え、同じ師匠の元で修学した者たちが結束し助け合った構造から始まったものである(イソンム, 2000)。尚、朝鮮王朝社会でこのような学縁を構成していた支配層は前述した門中組織形成の担い手でもあった。

一方、本論でいう地縁とは生まれ育った出身地域に基づく人間関係を指す。基本的に同郷縁という意味である。韓国語の地縁には住む土地に基づく縁故関係という意味もあるが、これは第2義である。第1義は生まれ育った出身地域(特に郡)に基づく人間関係を示す。このような地縁は基本的に門中組織の発達とともに、故郷を離れても故郷との関係が続く傾向からできたものであり、特に故郷に祖先の山所(墓)があれば、故郷と関係を絶つことはできない構造から発生したものである。

韓国では都市における同郷人による親睦の団体を一般的に郷友会(ヒャンウフェ)と呼んでいるが、例えばソウル市の在京珍島郡郷友会のように郡を単位とするものが実質的な意味を持つ最大規模の郷友会であるとされる。朝鮮王朝500年間にその数(330個前後)や範囲が一定した郡には行政権と司法権を持った地方長官が派遣されていた。この郡は今も基礎自治団体の単位になっているが、一般の人々からみれば、こうした郡は実質

の意味を持つ最大の生活単位であったといえよう。

一方、オンライン上のコミュニティを指す用語としてはバーチャルコミュニティなどもあるが、これらは主に現実世界の間人間関係と直接的な関係なく、オンライン上で交流が行われる場という意味が強い(遠藤, 2000)。ここでいう血縁、学縁、地縁に基づくインターネットコミュニティはこのようなバーチャルコミュニティと現実世界の血縁、学縁、地縁集団の間に位置し、この二つの性格を併せ持っている形態といえる。

韓国でこのような場合は殆どポータルサイトが提供するコミュニティサービスを利用しながら構成されており、主にメッセージのやりとりを通じて多対多の形でコミュニケーションが行われる。書き込みは様々な掲示板に体系的に分類され、長く保存される。またこのような類のインターネットコミュニティは一般的に「カフェ」と呼ばれ、血縁に基づくものは「宗親カフェ」、学縁に基づくものは「同窓会カフェ」、地縁に基づくものは「郷友会カフェ」と呼ばれる。したがって、本論でも血縁に基づくものは宗親カフェ、学縁に基づくものは同窓会カフェ、地縁に基づくものは郷友会カフェと記することにする。

2 研究方法

2.1 データの収集

一般的に宗親や郷友会カフェへの参加者はほとんど40代以上である。また、同窓会も同窓会が個人的な友人のレベルではなく、一つの体系的なネットワークとして社会的な意味を持ち始めるのは主に40代以降といえる。それで、ここでは2015年6月初めにパネル全員がインターネット利用者であり、尚且つインターネットコミュニティへの参加率も高いと思われる韓国のインターネット・リサーチ会社の一つであるマクロミルエムブレーションのパネルのうち、40代以上を対象に

オンライン調査を行った。

2015年6月初旬、この会社のパネル数は韓国国内のインターネット利用者1,080,388人である。そのうち、男性が50.8%、女性が49.2%であり、年齢層は10代14.1%、20代19.4%、30代23.0%、40代24.2%、50歳以上19.3%となっている。しかし、本研究の調査は住民基本台帳や選挙人名簿等を活用したランダムサンプリングではなく、回答も電子調査票による自記式調査で集めたため、サンプルが必ずしも韓国社会を代表するものとは言えない。結果の解釈においては、この点に注意すべきであると考えられる。

2.2 変数測定のための尺度の構成

本研究では内外の先行研究を活用しアンケート項目を作成した。まず事例研究（イユンボク, 2012; イユンボク, 2013）を参照し、次のように「この1年間、現実世界の門中・宗親会、同窓会、郷友会活動への参加」に関する9つの項目を作成した。

- 1) (各祖先の命日に家内に位牌をそなえ、祭物をそなえて行く) 忌祭祀に参加
- 2) (5世代以上前の祖先に対して、毎年一定の日に墓地で行われる) 時祭に参加
- 3) 門中行事に参加
- 4) 宗親会行事に参加
- 5) 同窓会の集まりに参加
- 6) 母校に寄付
- 7) 卒業後、母校を訪問
- 8) 郷友会の集まりに参加
- 9) 故郷関連団体に寄付

次に、橋元(2002)がインターネット利用の社会的な影響を検証するために使用した項目を参考に、次のように「日頃親しくつきあっている親戚、同窓生、同郷人の数」に関する6つの項目を作成した。

- 1) こちらから会いに行くのに1時間以内で会える親戚
- 2) こちらから会いに行くのに1時間以上かかる親戚
- 3) こちらから会いに行くのに1時間以内で会える同窓生(同級生、学校の先輩や後輩)
- 4) こちらから会いに行くのに1時間以上かかる同窓生(同級生、学校の先輩や後輩)
- 5) こちらから会いに行くのに1時間以内で会える同郷人(郷友、故郷の先輩・後輩)
- 6) こちらから会いに行くのに1時間以上かかる同郷人(郷友、故郷の先輩・後輩)

そして「人間関係効用性に対する認識」は、Yamagishi& Yamagishi (1994)による信頼性尺度の下位尺度である「人間関係の効用(utility)」の項目及び小林(1998)によるコネ利用観に関する項目を参考に次のように11項目を作成した。

- 1) 韓国社会は、人脈がものをいう社会だ。
- 2) 初対面の相手でも、知り合いの紹介があると親切にしてくれる。
- 3) 医師は患者が個人的な知り合いだと、普段よりも丁寧に診察する。
- 4) 能力が少し劣るだけなら、どの会社も縁故のある人の方を社員に採用するだろう。
- 5) 社会で成功するためには「コネ」や家柄が良くなければならない。
- 6) 人脈やコネに頼ると、その後のお返しが面倒だ。
- 7) 人脈やコネで頼まれたことをしてあげると、自分にとっても得になる。
- 8) 人脈やコネを使って何かをすると、結局高くつくと思う。
- 9) 人脈やコネでは、何かやってあげる側の人が一方向的に損をすることは少ない。
- 10) 実力がある人は、人脈やコネがなくても成

功できる。

- 11) 広い人脈を持つのは、その人が多くの人から信頼されているからである。

表-1 回答者の分布

		宗親カフェ		同窓会カフェ		郷友会カフェ	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
性別	男	143	68.8	407	68.6	206	68.4
	女	65	31.3	186	31.4	95	31.6
年齢	40代前半	98	47.8	245	41.6	112	37.3
	40代後半	52	25.4	158	26.8	79	26.3
	50代前半	26	12.7	101	17.1	58	19.3
	50代後半	20	9.8	59	10.0	33	11.0
	60代	9	4.4	26	4.4	18	6.0
学歴	中学校卒	0	0.0	1	0.2	0	0.0
	高校卒	27	13.0	82	13.8	49	16.3
	大学卒	143	68.8	414	69.8	203	67.4
	大学院卒	38	18.3	96	16.2	49	16.3
職業	自営業	30	14.4	86	14.5	42	14.0
	管理職	22	10.6	75	12.6	32	10.6
	自由業	4	1.9	14	2.4	6	2.0
	専門職	21	10.1	45	7.6	26	8.6
	事務職	90	43.3	250	42.2	135	44.9
	サービス業	4	1.9	30	5.1	15	5.0
	技能職	11	5.3	21	3.5	11	0.3
	保安職	1	0.5	1	0.2	0	0.0
	1次産業	0	0.0	1	0.2	1	0.3
	定年退職	4	1.9	12	2.0	9	3.0
その他	21	10.1	58	9.8	24	8.0	
世帯所得(ウオン)	199万以下	11	5.3	27	4.6	13	4.3
	200~299万	26	12.5	66	11.1	27	9.0
	300~399万	29	13.9	98	16.5	49	16.3
	400~499万	42	20.2	128	31.6	64	21.3
	500~799万	76	36.5	206	34.7	107	35.5
	800万以上	24	11.5	68	11.5	41	13.6

注1) 単位:人数は名, 割合は%

まず、次の表-1は回答者の分布である。967人の回答者のうち、宗親カフェへの参加者は208人、同窓会カフェへの参加者は593人、そして郷友会カフェへの参加者は301人である。宗親カフェ参加者は回答者の2割、郷友会カフェ参加者は回答者の3割程に過ぎない。

まずこれは基本的な資格さえあれば誰でも参加できる種類の宗親カフェが主な交流の場となっており、このようなカフェには様々な派門中、宗親会などの役員や関係者らが主に参加しているためであると考えられる。また、本論という地縁組織、即ち同郷縁組織には大都市に住んでいる地方出身の人々が主に参加しており、その他の人々はあまり参加していないためであると考えられる。同窓会カフェにも回答者の3割程は参加していないが、これは自分を中心に親しい同窓生のみとネットワークを構成することができるSNSを主に利用する人々もいるためであると考えられる。

全体的に回答者の学歴が高く、事務職従事者が多い。また、現実世界の血縁、学縁、地縁集団への参加様相と同様、宗親、同窓会、郷友会カフェともに回答者は男性が多い。

一方、二つの種類のカフェに参加している回答者も多く、宗親・同窓会カフェへの参加者は158人、宗親・郷友会カフェへの参加者は98人、同窓会・郷友会カフェへの参加者は260人である。そして参加カフェの数は概ね宗親及び郷友会カフェが1~2個、同窓会カフェが1~3個である。また、表-2のように宗親、同窓会、郷友会カフェ共に参加者の5割以上が2011年以降に加入している。

表-2 カフェへの参加時期

	1993~ 2005年	2006~ 2010年	2011~ 2015年
宗親カフェ	14.9	28.8	56.3
同窓会カフェ	23.9	23.1	53.0
郷友会カフェ	16.6	26.2	57.1

注1) 単位:%

注2) 宗親カフェ n=208, 同窓会カフェ n=593, 郷友会カフェ n=301

また、参加頻度をまとめた表-3のように同窓会カフェは、少なくとも1週間に3~4回以上参加する高頻度の利用者が多いが、宗親及び郷友会カフェはそうではない。また、表-4に示されるとおり、投稿頻度の分布は参加頻度の分布と類似している。

表-3 カフェへの参加頻度

	不参	低頻度	中頻度	高頻度
宗親カフェ	78.5	4.7	11.5	5.4
同窓会カフェ	38.7	9.7	23.7	27.9
郷友会カフェ	68.9	9.0	13.7	8.5

注1) 単位:%
 注2) 低頻度: 一ヶ月に1-2回, 二ヶ月に1-2回の合計
 中頻度: 1週間に1-2回, 2週間に1-2回の合計
 高頻度: ほとんど毎日, 1週間に3-4回の合計
 注3) 宗親カフェ, 同窓会カフェ, 郷友会カフェともに n=967

表-4 カフェへの投稿頻度

	不参	不投稿	低頻度	中頻度	高頻度
宗親カフェ	78.5	4.0	7.1	7.0	3.3
同窓会カフェ	38.7	9.8	16.9	22.3	12.3
郷友会カフェ	68.9	6.0	10.3	9.8	5.0

注1) 単位:%
 注2) 低頻度: 一ヶ月に1-2回, 二ヶ月に1-2回の合計
 中頻度: 1週間に1-2回, 2週間に1-2回の合計
 高頻度: ほとんど毎日, 1週間に3-4回の合計
 注3) 宗親カフェ, 同窓会カフェ, 郷友会カフェともに n=967

一方、次の表-5は、この1年間、宗親、同窓会、郷友会への参加様相をまとめたものであるが、7割以上の人々が忌祭祀や同窓会の集まりに参加しており、表-6に示されるとおり日頃親しくつきあっている親戚及び同郷人の数はそれぞれ10人、同窓生は15人ほどであることが分かる。

表-5 この1年間、宗親、同窓会、郷友会参加の様相

	ない	1回	2回	3回以上
忌祭祀に参加	21.6	29.2	21.7	27.5
時祭に参加	54.8	29.4	10.7	5.2
門中行事に参加	59.9	27.7	7.5	4.9
宗親会行事に参加	64.9	24.2	6.4	4.4
同窓会に参加	25.2	34.2	19.3	21.2
母校に寄付	75.2	17.5	4.3	3.0
母校を訪問	61.3	23.3	8.3	7.1
郷友会に参加	59.2	25.1	9.8	5.9
故郷関係団体に寄付	80.2	14.7	3.5	1.6

注1) 単位:% 注2) n=967

表-6 日頃親しくつきあっている人の数

会いに行くのに1時間以内で会える親戚	3.71人
会いに行くのに1時間以上かかる親戚	6.97人
会いに行くのに1時間以内で会える同窓	5.59人
会いに行くのに1時間以上かかる同窓	9.91人
会いに行くのに1時間以内で会える同郷人	3.24人
会いに行くのに1時間以上かかる同郷人	6.31人

注1) 単位:平均値 注2) n=967

また、人間関係の有効性に対する認識の項目をまとめた次の表-7によると、各項目について同意する割合が非常に高いことが分かる。

表-7 人間関係効用性に対する認識

	そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う
韓国社会は、人脈がものをいう社会だ	0.1	2.5	51.9	45.5
初対面の相手でも、知り合いの紹介があると親切にしてくれる	0.1	3.4	59.6	36.9
医師は患者が個人的な知り合いだと、普段よりも丁寧に診察する	0.2	6.2	54.0	39.6
能力が少し劣るだけなら、どの会社も縁故のある人の方を社員に採用するだろう	3.0	33.1	49.3	14.6
社会で成功するためには「コネ」や家柄が良くなければならない	0.9	9.8	52.6	36.6
人脈やコネに頼ると、その後のお返しが面倒だ	0.8	19.4	60.4	19.3
人脈やコネで頼まれたことをしてあげると、自分にとっても得になる	4.9	37.4	45.5	12.2
人脈やコネをを使って何かをする	2.3	32.4	52.2	13.1
と、結局高くつくと思う	2.0	34.1	52.9	11.0
人脈やコネでは何かやってあげる側の人が一方的に損をすることは少ない	6.2	30.4	46.1	17.3
実力がある人は、人脈やコネがなくても成功できる	2.9	22.0	58.5	16.5
広い人脈を持つのは、その人が多くの人から信頼されているからである				

注1) 単位:% 注2) n=967

一方、本研究では宗親、同窓会、郷友会カフェへの参加と人間関係効用性に対する認識との関係を検討するのも研究課題の一つである。人間関係効用性に対する認識を測定する11の項目それぞれについて、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法で評定させ、因子分析を行った。その結果、表-8のように4つの因子、即ち内集団びいき的傾向の認知、相互利益意識、負債感、実力主義の認知が抽出された。

表-8 人間関係効用性に対する認識の因子分析結果

	内集団 いよきの 傾向の 認知	相互 利益 意識	負債 感	実力 主義 の認 知
初対面の相手でも、知り合いの紹介があると親切してくれる	.825	.125	.035	.122
韓国社会は、人脈がものをいう社会だ	.782	.130	.089	-.035
医師は患者が個人的な知り合いだと、普段よりも丁寧に診察する	.777	.069	.128	.113
社会で成功するためには「コネ」や家柄が良くなければならない	.587	.388	.221	-.144
人脈やコネで頼まれたことをしてあげると、自分にとっても得になる	.106	.804	.147	.021
人脈やコネでは何かやってあげる側の人が一方的に損をすることは少ない	.055	.796	.098	.149
能力が少し劣るだけなら、どの会社も縁故のある人の方を社員に採用するだろう	.381	.625	.032	.063
人脈やコネを使って何かをする	.028	.067	.848	.153
と、結局高くつくと思う	.262	.193	.752	.023
人脈やコネに頼ると、その後のお返しが面倒だ	-.095	-.011	.094	.847
実力がある人は、人脈やコネがなくても成功できる	.214	.198	.076	.727
広い人脈を持つのは、その人が多くの人から信頼されているからである				

注1) 要因抽出方法: 主成分法, 回転方法: バリマックス回転法, 分析では因子得点を使用

3.2 宗親カフェと血縁の展開

まず、表-9のように、この1年間、現実世界の門中・宗親会活動への参加回数、日頃親しくつきあっている親戚の数、人間関係効用性に対する認識のいずれも、参加時期による平均値の差は統計的に有意ではない。

表-9 参加時期との関係(分散分析)

	1993 ~ 2005年	2006 ~ 2010年	2011 ~ 2015年	F値	有意水準
門中活動への参加 *1					
忌祭祀に参加	3.03	2.82	2.68	1.53	.218
時祭に参加	2.19	2.18	1.89	2.65	.073
門中行事に参加	2.29	2.13	2.03	.93	.393
宗親会行事に参加	2.32	2.07	1.88	2.83	.061
親戚との交流 *2					
親戚(1時間以内)	4.61	5.17	4.59	.21	.809
親戚(1時間以上)	10.19	9.17	8.19	.42	.653
効用性に対する認識 *3					
内集団いよきの傾向の認知	.06	-.08	-.12	.50	.605
相互利益意識	.33	.06	.14	.76	.467
負債感	.05	.10	.04	.08	.920
実力主義の認知	.46	.09	.07	1.94	.146

注1) *1 この1年間の回数の平均値
*2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
*3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

次に、表-10に示されるように参加頻度が多いほど、この1年間現実世界の門中・宗親会活動への参加回数の平均値が高く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。また、日頃親しくつきあっている親戚との交流の様相も同じである。

人間関係効用性に対する認識の場合、参加頻度が多いほど相互利益意識及び実力主義の認知の平均値が高く、このような平均値の差は統計的に有意である。しかし、参加頻度は内集団いよきの傾向の認知及び負債感とは、ほとんど無関係である。

表-10 参加頻度との関係(分散分析)

	不参	低頻度	中頻度	高頻度	F値	有意水準
門中活動への参加 *1						
忌祭祀に参加	2.49	2.44	2.76	3.08	6.13	.000
時祭に参加	1.56	1.67	1.99	2.38	22.06	.000
門中行事に参加	1.43	1.78	2.02	2.56	50.23	.000
宗親会行事に参加	1.37	1.60	1.96	2.42	48.55	.000
親戚との交流 *2						
親戚(1時間以内)	3.42	4.91	4.58	5.02	3.81	.010
親戚(1時間以上)	6.47	7.22	8.38	10.94	5.03	.002
効用性に対する認識 *3						
内集団いよきの傾向の認知	-.02	-.11	-.09	-.04	.70	.551
相互利益意識	-.04	.18	.01	.42	4.06	.007
負債感	-.01	-.03	.08	.08	.50	.681
実力主義の認知	-.03	-.01	.10	.35	2.95	.032

注1) *1 この1年間の回数の平均値
*2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
*3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

表-11は投稿頻度との関係であるが、投稿頻度が多いほどこの1年間現実世界の門中・宗親会活動への参加回数の平均値が高く、このような平均値の差は何れも統計的に有意である。

人間関係効用性に対する認識においても、投稿頻度が多いほど相互利益意識及び実力主義の認知の平均値が高く、このような平均値の差は二つとも統計的に有意である。しかし、投稿頻度は内集団いよきの傾向の認知及び負債感とは、殆ど無関係である。

表-11 投稿頻度との関係(分散分析)

	不参	不投稿	低頻度	中頻度	高頻度	F値	有意水準
門中活動への参加 *1							
忌祭祀に参加	2.49	2.28	2.81	2.85	3.09	5.33	.000
時祭に参加	1.56	1.51	1.93	2.07	2.72	21.89	.000
門中行事に参加	1.43	1.51	2.03	2.15	2.88	46.04	.000
宗親会行事に参加	1.37	1.33	1.83	2.12	2.94	53.66	.000
親戚との交流 *2							
親戚(1時間以内)	3.42	3.87	5.41	4.56	4.88	3.37	.009
親戚(1時間以上)	6.47	6.62	9.59	8.43	10.34	3.59	.006
効用性に対する認識 *3							
内集団いさめ傾向の認知	.02	-.05	-.04	-.12	-.12	.55	.697
相互利益意識	-.04	-.09	-.01	.15	.79	6.03	.000
負債感	-.01	.21	.01	-.04	.17	.79	.527
実力主義の認知	-.03	-.14	.07	.19	.49	3.22	.012

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

3.3 同窓会カフェと学縁の展開

まず表-12に示されるとおり加入時期が早いほど、この1年間現実世界の同窓会活動への参加回数および卒業後、母校を訪問した回数の平均値が多く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。

また、加入時期が早いほど日頃親しくつきあっている同窓生数の平均値が高く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。しかし、加入時期は人間関係の効用性に対する認識とほとんど無関係である。

表-12 参加時期との関係(分散分析)

	1993 ~ 2005年	2006 ~ 2010年	2011 ~ 2015年	F値	有意水準
同窓会活動への参加 *1					
同窓会に参加	2.88	2.87	2.61	5.35	.005
関連団体に寄付	1.58	1.56	1.43	2.17	.115
母校を訪問	1.96	1.90	1.66	5.88	.003
同窓生との交流 *2					
同窓生(1時間以内)	8.89	6.60	6.23	4.21	.015
同窓生(1時間以上)	16.68	11.15	11.27	4.80	.008
効用性に対する認識 *3					
内集団いさめ傾向の認知	.04	-.10	.04	1.23	.293
相互利益意識	.16	.08	.04	.74	.476
負債感	.02	-.13	-.02	1.02	.360
実力主義の認知	.01	.13	.10	.61	.543

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

次に表-13は参加頻度との関係を分析したものである。参加頻度が多いほど、この1年間現実世界の同窓会活動への参加回数および日頃親しくつきあっている同窓生数の平均値が高く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。

人間関係の効用性に対する認識の場合、参加頻度が多いほど相互利益意識及び実力主義の認知の平均値が高く、このような平均値の差は二つとも統計的に有意である。しかし、内集団いさめ傾向の認知及び負債感はそのようではない。

表-13 参加頻度との関係(分散分析)

	不参	低頻度	中頻度	高頻度	F値	有意水準
同窓会活動への参加 *1						
同窓会に参加	1.78	2.19	2.63	3.00	94.84	.000
関連団体に寄付	1.12	1.33	1.45	1.60	28.26	.000
母校を訪問	1.33	1.53	1.74	1.92	25.73	.000
同窓生との交流 *2						
同窓生(1時間以内)	3.44	4.40	7.50	7.37	19.32	.000
同窓生(1時間以上)	5.75	8.87	11.90	14.36	17.56	.000
効用性に対する認識 *3						
内集団いさめ傾向の認知	-.01	-.00	-.09	.10	1.76	.153
相互利益意識	-.13	.03	.06	.11	3.82	.010
負債感	.06	.10	-.02	-.10	1.76	.153
実力主義の認知	-.14	.03	.03	.15	4.97	.002

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

表-14は投稿頻度との関係であるが、参加頻度と同様、投稿頻度が多いほどこの1年間現実世界の同窓会活動への参加回数及び日頃親しくつきあっている同窓生数の平均値が高く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。

人間関係の効用性に対する認識の場合、投稿頻度が多いほど相互利益意識及び実力主義の認知の平均値が高く、このような平均値の差は二つとも統計的に有意である。しかし、内集団いさめ傾向の認知や負債感はそのようではない。

表-14 投稿頻度との関係(分散分析)

	不参	不投稿	低頻度	中頻度	高頻度	F値	有意水準
同窓会活動への参加 *1							
同窓会に参加	1.78	2.06	2.60	2.90	3.15	79.48	.000
関連団体に寄付	1.12	1.21	1.33	1.53	1.89	36.88	.000
母校を訪問	1.33	1.44	1.63	1.85	2.17	27.12	.000
同窓生との交流 *2							
同窓生(1時間以内)	3.44	5.11	6.83	8.06	6.58	13.96	.000
同窓生(1時間以上)	5.75	9.63	11.73	12.52	15.99	13.24	.000
効用性に対する認識 *3							
内集団内の傾向の認知	-.01	-.01	-.03	.04	-.06	.29	.880
相互利益意識	-.13	.02	-.14	.10	.40	8.15	.000
負債感	.06	-.09	-.03	-.08	.09	1.24	.289
実力主義の認知	-.14	-.08	.04	.07	.32	5.76	.000

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

3.4 郷友会カフェと地縁の展開

まず表-15に示されるとおり、参加時期はいずれの変数とも統計的にほとんど無関係である。

表-15 参加時期との関係(分散分析)

	1993 ~ 2005年	2006 ~ 2010年	2011 ~ 2015年	F値	有意水準
郷友会活動への参加 *1					
郷友会に参加	2.50	2.48	2.24	2.73	.066
関連団体に寄付	1.68	1.61	1.49	1.45	.236
同郷人との交流 *2					
同郷人(1時間以内)	4.18	4.86	4.60	.12	.881
同郷人(1時間以上)	16.28	11.14	9.08	2.92	.055
効用性に対する認識 *3					
内集団内の傾向の認知	.10	-.03	-.18	2.05	.130
相互利益意識	.12	.22	.10	.35	.700
負債感	.03	.06	.02	.03	.963
実力主義の認知	.18	.01	.24	1.47	.231

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

次に表-16は参加頻度との関係を分析したものであるが、宗親カフェ及び同窓会カフェの分析結果と同様、参加頻度が多いほどこの1年間現実世界の郷友会活動への参加回数及び日頃親しくつきあっている同郷人の数の平均値が高く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。

人間関係効用性に対する認識の場合、参加頻度が多いほど、相互利益意識及び実力主義の認知の

平均値が高く、このような平均値の差は二つとも統計的に有意である。しかし、内集団びいきの傾向の認知及び負債感はそうではない。

表-16 参加頻度との関係(分散分析)

	不参	低頻度	中頻度	高頻度	F値	有意水準
郷友会活動への参加 *1						
郷友会に参加	1.30	1.97	2.34	2.76	161.0	.000
関連団体に寄付	1.13	1.36	1.55	1.76	45.52	.000
同郷人との交流 *2						
同郷人(1時間以内)	2.63	3.67	4.89	5.12	8.66	.000
同郷人(1時間以上)	4.27	8.44	11.51	12.23	22.13	.000
効用性に対する認識 *3						
内集団内の傾向の認知	.04	-.13	-.14	.00	1.89	.129
相互利益意識	-.06	.04	.17	.18	3.21	.022
負債感	-.01	.15	-.00	-.02	.79	.495
実力主義の認知	-.07	.07	.17	.27	4.98	.002

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

表-17は投稿頻度との関係を分析したものであるが、これも、また上記の宗親カフェ及び同窓会カフェの分析結果とほぼ同じである。投稿頻度が多いほど、この1年間現実世界の郷友会活動への参加回数及び日頃親しくつきあっている同郷人の数の平均値が高く、このような平均値の差はいずれも統計的に有意である。

また、人間関係の効用性に対する認識の場合、投稿頻度が多いほど相互利益意識及び実力主義の認知の平均値が高く、このような平均値の差は二

表-17 投稿頻度との関係(分散分析)

	不参	不投稿	低頻度	中頻度	高頻度	F値	有意水準
郷友会活動への参加 *1							
郷友会に参加	1.30	1.78	2.37	2.39	2.90	125.9	.000
関連団体に寄付	1.13	1.10	1.45	1.71	2.00	51.28	.000
同郷人との交流 *2							
同郷人(1時間以内)	2.63	2.88	4.49	4.87	6.35	8.09	.000
同郷人(1時間以上)	4.27	13.52	8.63	9.25	15.21	19.08	.000
効用性に対する認識 *3							
内集団内の傾向の認知	.04	-.02	-.08	-.15	-.12	1.26	.280
相互利益意識	-.06	-.08	-.01	.20	.60	5.37	.000
負債感	-.01	-.06	-.06	.10	.24	1.17	.318
実力主義の認知	-.07	.03	.06	.28	.34	4.53	.001

注1) *1 この1年間の回数の平均値
 *2 日頃親しくつきあっている人数の平均値
 *3 其々の人間関係効用性に対する認識の因子得点(-1~1)の平均値

つとも統計的に有意である。しかし、内集団びいきの傾向の認知及び負債感はそうではない。

4 総合考察

韓国では朝鮮王朝時代から父系血縁、学縁、地縁が発達し、これは韓国社会の都市化、高度成長の過程で大きな影響を及ぼしてきた。また、情報化とともに韓国のオンライン上には一般的にカフェと呼ばれる様々な宗親、同窓会、郷友会インターネットコミュニティが構成されている。本論ではアンケート調査を通じて、宗親、同窓会、そして郷友会カフェへの加入時期、参加頻度、そして投稿頻度と三つの変数、すなわち1) 現実世界の門中・宗親会、同窓会、郷友会活動への参加、2) 日頃親しくつきあっている親戚、同窓生、同郷人の数、3) 人間関係の効用性に対する認識との関連について検討した。

その結果、加入時期は同窓会活動への参加、日頃親しくつきあっている同窓生の数のみと統計的に有意な関連があり、加入時期が早いほど同窓会活動への参加回数及び日頃親しくつきあっている同窓生の数が多いことがわかった。しかし、加入時期とその他の変数はいずれも統計的にほとんど無関係である。

一方、参加頻度及び投稿頻度は二つとも三つの変数と統計的に有意な関連があった。宗親、同窓会、郷友会カフェへの参加頻度及び投稿頻度が高いほど、現実世界の門中・宗親会、同窓会、郷友会活動への参加も盛んであり、日頃親しくつきあっている親戚、同窓生、同郷人の数が多い。また、相互利益意識や実力主義の認知が深まっているのがわかる。なぜこのような結果が出たのであろうか。

まず血縁、学縁、地縁の構造的な関係が一つの要因であると考えられる。伝統的に門中と学縁の構成主体は二つとも韓国社会の同じ支配層であり、学縁の中でも特に高校の学縁は、地縁と重な

る場合が多かったためであると考えられる。実際本研究の調査でも、回答者の宗親、同窓会、郷友会カフェへの重複参加が著しい。

次に高度成長後、社会的に血縁、学縁、地縁との関係がさらに深まる傾向も一つの要因であると考えられる。例えば韓国社会学会の調査によると、高度成長以降、若い世代ほど、血縁・学縁・地縁を重んじる傾向が高い。即ち、「今日、社会的に成功するには、次の中でどれが重要だと思いますか」という質問に対し、本人の努力が66.4%、一般的に血縁・学縁・地縁を指す縁故が本人の努力に次いで多く22.8%、生まれつきの才能が6.2%などとなっている。世代別の分布をみると、本人の努力は40代以上が70.1%、30代以下が64.3%であり、40代以上の方が高い。縁故は40代以上が17.2%、30代以下が26.1%であり、若い世代ほど縁故が社会的成功を決める要因として重要であると認識しているのである（韓国社会学会、1990）。

また韓国開発研究院の報告書によると、2003年から2007年までに就職した6165人のうち3477人（56.4%）が友人や親戚・家族などの人脈を通じて職をみつけている。特に企業の規模が小さいほど「人脈採用」のウェイトが大きく、従業員の数が50名未満のメーカーは公開採用の割合が5%余りに過ぎなかった。従業員が1000名以上の企業でも人脈採用が47.3%であり、32.9%の公開採用よりはるかに多かった（キムヨン Chol 2011）。

第三に血縁、学縁、地縁は何れもその中に様々なレベルの集団があるが、1970年代から始まる急激な都市化と共に都市では新たにより広い範囲で集団が構成され、このような集団が集団やネットワークとしてより実質的な意味を持つようになる。これもひとつの要因であると考えられる。具体的に成員数が普通10万以上に達する血縁の場合、⁽⁷⁾ 都市で遠親者で新たに構成される血縁集団である宗親会が集団やネットワークとしてより実

質的な意味を持つようになる(魯富子, 2000)。

地縁の場合, 同郷組織の中には郡の下位行政区域である面や村に基づく多くの郷友会とともに, ソウル在住の珍島郡出身者である弁護士, 企業の代表取締役, 会長, 銀行支店長, 国会議員などの有力者15名で構成される沃友会, そしてソウル在住の珍島郡出身者である税理士, 法務士, 公認会計士, 税関職員など12人で構成されるハンジン会などのように(伊藤, 2002), 社会的な地位や職種別の同郷組織も多く構成され, このような同郷組織が集団やネットワークとしてより実質的な意味を持つようになる。特に, このような同郷組織は出郷人の数が数万人以上に達する郡全体のレベルでなければ組織の構成が容易ではない。

このことは学校の同窓会も同じである。特に地方所在の学校の場合, 卒業生が全国に散り, クラスや同期生だけでは集団としての同窓会を構成することすら難しくなる。このことは社会的な地位や職種別の同窓会組織の構成においても同様である。そのためこのような集団は閉鎖的な構造を持ち成員は互いに親密感を共有しているのも事実であるが, 成員間の関係は事実上, 二次的な人間関係に近い。大半の成員はお互いに面識すらなかった間柄であり, 能動的に活動しなければ意味を持つ人間関係にはなれない状況であるといえる。

このような中, 宗親, 同窓会, 郷友会カフェへの参加頻度や投稿頻度が高いほど, 現実世界の門中・宗親会, 同窓会, 郷友会活動への参加が盛んであり, 日頃親しくつきあっている親戚, 同窓生, 同郷人の数が多く, 相互利益意識と共に実力主義の認識が高まっていると考えられる。このような研究結果は情報化以降, 韓国で血縁, 学縁, 地縁が私的な性格とともに社会的な性格も併せ持っているということを示唆すると言えよう。

特に序論で述べたように現在, 韓国の政治, 経済などの領域はウリ, 即ち血縁, 学縁, 地縁ベースに構成されており, このような中でウリの社会的機能はウリの情実的, 一次的な性格のゆえ否定

的に評価されてきた。しかし, 本研究の結果はこのような既存の見解に対し, 韓国社会で血縁, 学縁, 地縁は情実的・一次的人間関係としての性格だけでなく, 社会的・二次的人間関係としての性格も持っていることを示唆している。

一方, 本研究では先行研究を参照し, 40代以上を対象に血縁, 学縁, 地縁カフェへの参加と人間関係ネットワークとの関連について分析した。今後, 若い人たちも年を取れば, このような血縁, 地縁カフェに参加するのか。現在の40代以下は大都市出身者が多いが, 彼らにとって故郷はどのような意味を持つか。こうした中, 学縁のウェイトはどのように変貌していくのかなどについて検討が必要であろう。

注

- (1) 純粋な韓国語である「ウリ」は本来「境界(垣)」または「小さい家」という意味である。
- (2) 具体的に全斗煥及び盧泰愚政府では慶北高, 金泳三政府では慶南高, 金大中政府では木浦商高, 光州一高, 全州高, そして盧武鉉政府では, 釜山商高の出身が重用される(ソングクゴン, 2007)。
- (3) 例えば, 金泳三政府の成立後, サムスン(三星)グループはTK(大邱・慶北のイニシャル)の大父として知られていたサムスン物産会長を退陣させ, TK中心の既存経営陣をPK(釜山・慶南のイニシャル)中心に再編した。LGグループは系列社の社長団の半分をPK出身で任命した。このような傾向は市中銀行の人事でも同じであるという(チョンジファン, 1996)。
- (4) 例えば延世大学社会学科のリュソクチュン研究室, ソウル大学行政大学院のチョンサンイン研究室などがある。
- (5) 本貫(本)は基本的に氏族発祥の地名をさし, 慶州金氏のように姓氏と組み合わせる表記される。現在, 韓国において例えば慶

州金氏と金海金氏とでは、同じ金姓であっても本貫が異なり、父系血縁関係を持たない他族とされる。

- (6) この論争は1659年(1次)及び1674年(2次)に王家の喪礼をめぐる執権内閣と野党の間に起こった政争である。誤った見解を提示したという理由で、執権内閣が失脚することになる。
- (7) 韓国統計庁(2003)によると、成員が10万人以上の同姓同本集団の数は82であり、この82集団成員の合計は全体人口の約72.6%に達する。

参考文献

- (1) 日本語, 韓国語, 英語の順。三つともアルファベットの順。
- (2) 本論文で、韓国語資料の著者の名前表記は次のようにした。本文では韓国語資料の著者の名前をカタカナだけ記入し、参考文献では韓国語資料の著者の名前を「カタカナ(漢字またはハングルの名前)」の形で書いた。ただし、資料が韓国語であっても著者が団体の場合は本文及び参考文献の何れも著者名を漢字語だけで表記した。
- 遠藤薫(2000)『電子社会論—電子的想像力のリアリティと社会変容』実教出版, 22p.
- 橋元良明(2002)「インターネット・パラドックスの検証」, 『インターネットの利用動向に関する実態調査報告書』, pp.76-88.
- 橋元良明 他(2007)「ネット利用とオンラインコミュニティの日韓比較」, 『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』24, pp.1-48.
- 伊藤巫人(2002)「韓国における任意参加の組織—地方出身者の結社を中心として」, 伊藤巫人・韓敬九編『韓日社会組織の比較』慶応義塾大学出版会, pp.185-212.
- 小林江里香(1998)『社会的資源獲得のためのネットワーク利用に関する研究:「コネ」の社会心理学的アプローチ』東京大学大学院博士論文
- 三木英明(2011)ソウルのお作法(22):学縁(<http://www.link-gs.co.jp/column/2011/11/21060004.html>)
- 魯富子(2000)「韓国の都市化の展開に伴う同姓結合の生成と変容」, 吉原和男 他(編)『血縁の再構築』風響社, pp.123-152.
- 朴承寛(2005)「韓国社会の近代化過程と社会的コミュニケーション世界の変動」, 『情報学研究:東京大学大学院情報学環紀要』68, pp.3-41.
- チョンジファン(정지환)(1996)「次期大統領, ソウル大出身はだめ」, 『マル』117, pp.114-121
- イスゴン(李樹建)(2003)『韓国の姓氏と族譜』ソウル大学校出版部
- イソナム(李成茂)(2000)『朝鮮時代党争史』東邦メディア
- イユンボク(李潤馥)(2007)「韓・日情報文化比較研究:オンライン空間を通じた社会関係展開を中心に」, 『KADO ISSUE REPORT』4, pp.1-32.
- イユンボク(李潤馥)(2009)「現実基盤型コミュニティとオンライン基盤型コミュニティの機能的な関係:ニッチ(niche)分析を中心に」, 『情報化政策』16(2), pp.123-139.
- イユンボク(李潤馥)(2012)「韓国の宗親インターネットコミュニティの展開に関する探索的研究:ダウム・カフェの韓山李氏宗親カフェを中心に」, 『社会科学研究』23(4), pp.319-348.
- イユンボク(李潤馥)(2013)「韓国の地縁インターネットコミュニティの展開に関する探索的研究:ダウムの尚州市地域/故郷カフェを中心に」, 『社会科学研究』24(2), pp.113-140.
- 韓国インターネット振興院『インターネット利用実態報告書』各年度版(2000-2014年)
- 韓国社会学会(1990)『韓国社会の世代問題』ナム
- キムヨン Chol(김영철)(2011)『求職における人

- 的ネットワーク依存度推定』韓国開発研究院
 リュソクチュン (柳錫春) (2002) 『韓国の市民
 社会, 縁故集団, 社会資本』自由企業院
 ソングクゴン (宋国建) (2007) 『権不十年 一体,
 大統領府では何が』ネモブックス
 統計庁 (2003) 『2000人口住宅総調査: 姓氏および
 本貫』統計庁
 Coleman, J.S. (1988). Social Capital in the
 Creation of Human Capital. *American
 Journal of Sociology*, 94, S95-S120.
 Ishii, K., & Ogasahara, M. (2007) .Links
 between real and virtual networks: A
 comparative study of online communities
 in Japan and Korea. *CyberPsychology &
 Behavior*, 10 (2), 252-257.
 Kim, Y., Sohn, D., & Choi, S.M. (2011) .
 Cultural difference in motivations for using
 social network sites: A comparative study
 of American and Korean college students.
Computers in Human Behavior, 27 (1), 365-
 372.
 LEE, Y. (2009) The Evolvement of Social
 Relationships as Influenced by the Spread of
 the Online Community, *Journal of Socio -
 Informatics* 2, pp.33-52.
 Putnam, R.D. (1995) Bowling Alone:
 America's Declining Social Capital, *Journal
 of Democracy* 6 (1), pp.65-78.
 Putnam, R.D. (2000) *Bowling Alone:
 the collapse and revival of American
 community*. London: Simon & Schuster.
 Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994)
 Trust and commitment in the United States
 And Japan, *Motivation and Emotion* 18,
 pp.129-166.